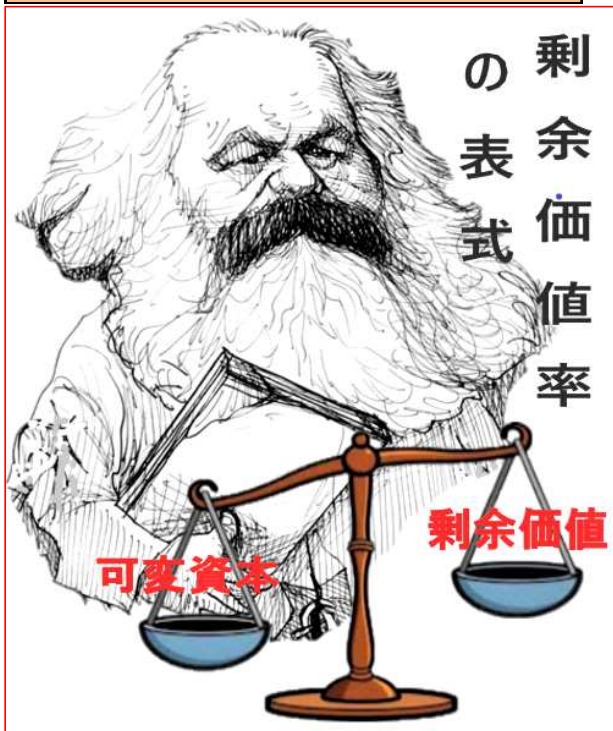


DAS KAPITAL



3月学習会の案内です 第49回「資本論を読む会」

日時：3月27日（月曜日）

午後6時30分 Zoomで開催

「第6篇 労働賃金 第17章 労働力の
価値または価格の労働賃金への転化」

2月27日に開いた第48回「資本論を読む会」は、「第16章 剰余価値率の種々の表式」(p43-48)でした。この章は「資本論の中でももっとも短い章」だということです。内容も、ほとんど今までに学んできた剰余価値率・搾取率などのまとめみたいなものでした。しばらくぶりに余裕?をもって議論できたのではないのでしょうか。この「表式」については、下記の「レポーターから」に転載されている三つの表式を参考に見て下さい。

春闘・賃金闘争で課題となる労働分配率とは「企業収益と労働対価のバランスを示す経営指標で、売上総利益に占める人件費の構成比率」といわれます。日本の労働分配率は62.6%(2021年度)ということですが、「剰余価値率はどの程度になるの

かな?」「郵政職場の搾取率は?」等と議論になり、結局は宿題にしました。計算してみると面白いかも知れませんね。今回の参加者は選挙戦の合間を縫って参加した10名。

閉会後の懇親会では、知事選や同志の道議選、自民党の「連合との共闘方針」、ウクライナ1年(停戦をどう考えるか)で結構ヒートした議論になりました。

「みんなと一緒にやれば何とかあります」。今からでも新規参加を歓迎します。連絡下さい。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから

- Kai

第1巻資本の生産過程、第5編絶対的剰余価値と相対的剰余価値の生産、第16章剰余価値率の種々の表式

■剰余価値率の表式

$$I \quad \frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} \left(\frac{m}{v} \right) = \frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$$

・上記の表式は、概念的に厳密なものである。(物事の何たるか(剰余価値率、搾取)を、細かに見きわめている。)

*古典派経済学では、意識的には仕上げられず、次のような派生的な諸式が示される。

(派生的な=本源的ではない、部分的に分かれ出た、大元でない、根源ではない)

$$II \quad \frac{\text{剰余労働}}{\text{労働日}} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{生産物価値}} = \frac{\text{剰余生産物}}{\text{総生産物}}$$

・(すべてこれらの表式では、)労働搾取度、すなわち剰余価値率は間違っ表表現されている。

・これらの(派生的な)表式は、労働日またはその価値生産物が、資本家と労働者とのあいだに分割される割合を表現している。

・表式IIにおいては、剰余価値および労働力の価値の表示は、可変資本と労働力との交換と、労働者の生産物からの排除を隠している。・それに代わって現れるものは、労働者と資本家とかが、生産物を分配する協同関係という虚偽の外観である。

■第IIIの表式(表式III)

$$III \quad \frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}} = \frac{\text{不払労働}}{\text{支払労働}}$$

\frac{\text{不払労働}}{\text{支払労働}} は、\frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}} の表現にすぎない。

・資本は、労働に対する指揮権であるのみならず、本質的には、不払い労働に対する指揮権である。

・すべて剰余価値は、不払労働時間が具体化したものである。

■なぜ、資本が自己増殖するのか?それは、資本が、一定量の他人の不払労働を自由にできるからである。

